




四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

今回は、「CIL 星空」代表の井谷重人さん（愛媛県松山市）にお話を伺いました。

「CIL 星空」は、松山市内を中心に、「障がい者が障がいのない人と同じように暮らせるようにしたい」、「障がいを理由に『できない』ということをもてなくしたい」という思いのもと、地域で一人でも多くの障がい者が自立生活を行えるように支援やサービス活動、そのほか講演や研修を行っています。

様々な活動をされている井谷さんへのインタビューは、ヨルダンから帰国されて間もないところにお邪魔しました。

 先日、ヨルダンに行かれていたということですが、渡航の目的等教えてくださいいただけますか？

JICAのお手伝いとして、ヨルダンにいるシリア人難民に対する支援を行っています。今回で3回目になります。難民キャンプ等にいる人は、ほとんどが難民指定されて就労もできない状態にあり、なおかつその中には、銃で撃たれて僕と同じような脊髄損傷の障がい者もいて、そのような方にピアカウンセリング

（※1）や自立の考え方を伝えて、仲間同士で支え合えるようにと支援を行っています。

支援をしていく中で、シリア難民自身が活躍し始め、国境なき医師団のピアカウンセラーとして雇われたりもして、幅広く活動するようになりました。それ


（※1）ピアカウンセリングは1970年代初め、アメリカで始まった自立生活運動の中でスタートしました。自立生活運動は、障がいを持つ当事者自身が自己決定権や自己選択権を育て、支えあって、隔離されることなく、平等に社会参加していくことを目指しています。ピアカウンセリングでは、お互いに平等な立場で話を聞き合い、きめ細かなサポートによって、地域での自立生活を実現する手助けをします。

「全国自立生活センター協議会HP」より

を見たヨルダン政府の労働省が、ピアカウンセリングは必要だということで、現在は、ヨルダン政府とJICAのプロジェクトとして呼ばれて、ヨルダン人にもピアカウンセリングを伝えています。

ピアカウンセリングは、障がい者が障がい者の専門家である、という考え方に立ったもので、アジア、アフリカ、中南米にも広がっています。中東にはなかったなので、僕たちにも広めたいという思いがありました。

障がい者として生きていくうえで、自分自身を認められなかったり、「対健常者」という考え方で自分に抑圧をかけている人、健常者に依存している人もいますが、そうではなくてみんなが対等に生きていけるように、そこから抜け出せるように、という思いでやっています。

 CILの活動が、まさにそういうことにつながっているのだと思います。差し支えなければ、井谷さんの障がいについて教えていただけますか。

もとは大学生の時（22歳）の交通事故が原因です。外傷はそれほどなかったけれど、首の骨を骨折して、体が動かなくなりました。ショックはショックでしたがあまり自覚はありませんでした。1年半で退院し、リハビリ病院へも行きましたが、途中から「リハビリはいいや」と思うようになりました。正直、人に会いたくなくて、ふさぎ込んでいたんです。一般的には、自分で生活できるようにリハビリ施設でノウハウを学んでいくのですが、僕は親にめっちゃ依存していて、親がいなくなったら生きていけない、という感じでした。それまで家族はみんな別々に暮らしていたのですが、僕の介助のこともあり、みんなで一緒に暮らすことになりました。それが23歳の時です。それから約5年間、ほとんど外出しませんでした。街に出かけたら、知ってる人に会うんじゃないか、と思うとそれが嫌で。映画が好きだったけれど、映画館にも行けなくなりました。ひたすら家でレンタルビデオ（映画）を観る日々を過ごしました。

ずっとそんな生活でいいとは思っていませんでしたが、「ケガしてるから許される」という感覚もあり、自暴自棄になっていた部分もあったと思います。

大学に入る前は、もともと働い



CIL 星空代表の井谷さん（前列左）と事務局長の三ツ井さん（前列右）

ていたんです。高校を卒業して2年間、岐阜で服の卸売りの営業マンをやっていました。社会と関わることの面白さを知っていたから、ずっと家にいて、そのつながりが切れている状態が、だんだん不安になってきたんです。そうしたら、「障がい者でも働けるよ」という情報があって、やってみようかなと思いました。

その情報はご自身で探されたのですか？

いいえ。体が動かない以上に心が動いてなくて… 家族から、「こんな仕事があるよ、こんなにすごく頑張っている人がいるよ」と言われても、「それは僕じゃないし、できるわけない。なんでそんなスーパーマンみたいな人の話をするんだ！」と、泣くか、キレるかしていました。

でも、親が話していたことが、頭の片隅に残っていたんですよね。だから、「そういえばあんな人がいたなあ」と思い出して聞いてみたんです。

その会社の仕事は、在宅でパソコンでできるものでした。ホームページの作成とか、結婚式のエンドロールを作成するとか。最初は社会とつながることが目的で就職しましたが、やるからには生活できるように頑張ろうと2、3年続けました。けれども作業の割には収入が少なく、かといって社会ともつながりきれず、結局辞めることになりました。

どうしても一般の人と比べてしまうんです。また、実家で暮らしていると、僕のことでもめ事も起こって、誰が僕の体位変換をするかとか、食事をさせるかとか。僕自身も「してもらっている」ことを感じて、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。自分も20代後半になって焦りも出てきて、この状況はずっと続かないな、と考えました。

友達の僕への接し方も、事故に遭う前とは違ってきて、ベッドで寝ていると、「おい、重人！」みたいに、元気づけるつもりであえて強く言ってくれたのかもかもしれませんが、上から目線で言われているように感じました。ずっと引きこもっていると、部屋の中だけが僕の世界なんです。だから、友人といえどもその中に入ってきて、「わーっ」とかき回されるのはすごく嫌だったんです。

そんな状況でも、CILを立ち上げるキッカケがあったのですか？

退院後の在宅時から6、7年間ずっと来てくれていた鍼灸師さんがいて、マッサージ中にその方といろいろお喋りしてたんですが、僕は映画が好きだったので、話題も自然と映画のことが多くなりました。すると、鍼灸師さんも映画を見たいようになって、「一緒に行けたらいいなあ」とか、「井谷君となら行ってみたい」とか言われるようになりました。「一緒に行こう」と自然に誘われたのがとてもうれしかったです。家族以外の人と外出したのは初めてで、その日




は、映画の内容も覚えていないくらい緊張したんですが、それがきっかけで、これなら外出できると思えるようになりました。

また、外にも目が向くようになり、親とだけの時間じゃなく、このままヘルパーの時間数を増やして、いろんなことをしてみようと思うようになったんです。それで、（呼べばすぐに

来てもらえるように）実家から近い距離に部屋を借りて、一人で暮らすようになりました。それが12年前だったと思います。

自立というよりは、親と住まない生活もあるのでは、との考えでやってみました。だから、その鍼灸師さんの影響は大きかったです。そうじゃなければ、家を出ようという気にはならなかったと思います。

「映画を観に行こう」と誘われたタイミングもよかったのかも知れませんが、同じことを別の時期に言われても、素直に聞けなかったかも知れないですから。

 **かけがえのない方との出会いが、自立生活への一歩になったわけですね。その後、さらに生活に変化が出てきたのでしょうか？**

実家を離れて1年間は、昼間にはヘルパーに入ってもらってたんですが、夜中になると、例えば痰が詰まりそうになったりするので、親に何度となく来てもらう生活でした。そうすると、離れて暮らしているけれど、この生活ってあまり意味ないんじゃないかと思うようになりました。ヘルパーも夜遅くになると来てもらえないですし。

市役所に相談すると、唯一相談できる所として「自立生活センター・松山」を紹介され、「昼間は今のままでいいけど、夜間だけヘルパーに入ってもらえますか？」とお願いしたんです。すると、「自立生活センターではそういうふうに一部だけヘルパーが入ることはできない」と言われました。「ここは障がい者が『自立生活』という生き方をする人を対象としているから」と。まさか断られると思ってなかったので「えー!？」となりました。このままだと、夜間は支援を受けられず、再び家族との生活に逆戻りしてしまいます。

それで、考えた末に「自立生活」を受け入れようと決めました。今まで来てくれていた慣れたヘルパーを泣く泣く断って、あらたな生活を始めました。

「自立生活」は、自分が責任を持つ生活のことで、ヘルパーが世話してくれるのではなく、全てを障がい者自身の意志で行うことになります。全て説明しない

と、ヘルパーは動いてくれず、たとえヘルパーが失敗しても、障がい者自身の責任になるんです。ヘルパーのせいになっている以上は、自立できていないということです。最初は、理不尽だなあと感じていました。

だから自立生活を始めた頃は「最悪」でした。ある時、出先で車検証をヘルパーに預けることがあったのですが、家に帰ってきたら、ヘルパーが「忘れしました」と言うんですよ。「え!? なんで忘れてきたの!」て怒ったら、センターの責任者が飛んできて、「それは井谷君の責任だ。忘れ物はないか声をかけるとか、ちゃんとヘルパーのことを見て、そのうえで忘れたのならヘルパーの責任だが、持ってて当たり前と思うのは間違い。怒る前に自分の責任を考えてください」と逆に僕が叱られました。


その時は「なんだこれは!？」と思ったんですが、だんだんと、自由というのはそういうものなのかな、と考えるようになりました。何でもいい自由というのは、本当の自由ではないんですね。そんな中で、自分のことは人のせいにせずに生きていこう、ということが身についたと思います。それができるようになると、人に来てもらって自分のことをお願いしながら生きていくのが楽しくなってきた、ヘルパーにも安心して介助に入ってもらえるようになりました。

そうすると、今度は「自立生活センター」の利用者としてではなく、自分自身がこの考え方を伝え、広げたいと思うようになったんです。それがCIL 立ち上げのキッカケです。2009年4月1日に立ち上げて10周年で、今年で11年目に入りました。

僕はヘルパーがいることで人と対等になれる。以前は両親に対しても一人の大人として話せなかったけれど、今は大人として対等に話せます。それは親の世話になっていないから。また、友達とも以前と同じような形で付き合えるようになりました。僕にとってヘルパーの存在は、体を動かすだけでなく、人間として生きていくうえでなくてはならない存在になっています。それを人に伝えていくことと、それに賛同して地域に出てくる人たちを増やすのが今の生きがいになっています。

(※2) 平成30年5月、バリアフリー法(高齢者、障がい者等の移動等の円滑化の促進に関する法律)の一部改正を受け、四国地域における移動等円滑化の進展状況を把握・評価することを目的に、「移動等円滑化評価会議四国分科会」が設置され、第1回目となる四国分科会を令和元年7月17日に開催しました。

四国分科会では、事業者団体、自治体等の取組報告や、障がい当事者団体から事前に出された意見・要望をもとに、意見交換を行いました。

 先日、移動等円滑化評価会議四国分科会(※2)にご出席いただき、ご発言もいただきましたが、意見交換の時に事業者が行う研修への様々な障がい当事者の参画についてご提案いただきました。その他、分科会で言い足りなかったり、分科会に対するアドバイス等いただけないでしよ

うか。

事業者がバリアフリーの研修をやるのだったら、僕たちにも機会を与えてほしい、そして、いろいろな障がいのことを理解してもらいたい、という趣旨で話しました。バスの運転手や事業者の前で、僕たちが話す意味や意義を理解してもらえたら、次につながられるかなと思うのです。そうすれば、研修の時間も増やしていけたり、内容も深められるかなと思って。ところが、現状ではなかなか入口に立てないんです。事業者の研修に行きたいと伝えても、なかなか実現しない……僕たちじゃなくても他の障がい当事者団体が話せばいい、少しでもそういった機会が増えればいい、と思っています。

これは、DPI日本会議(※3)の方が話してくれたのですが、松山では電車から車掌が降りてきて、スロープを設置してくれるから、無人駅でも対応してもらえる。無人駅のとりくみとしていいのではないかとのことでした。

こうした対応は鉄道会社によって全く異なってきます。東京であっても、降車駅側と連絡が取れないから

と待たされ、目の前を何本もの電車が通り過ぎていくこともしばしば。理由や意味があって、待たされるのならいいのですが、ずーっと待っていると、「なぜ待っているんだ？」と思うこともあり、本当にこれで障がい者と健常者が共生していけるだろうか、ということを感じさせられました。

僕は全国を動き回っていて、先進的な事例も見せてきているので、分科会でも事業者の前向きな発言を聞きたいなあ、と思っていました。だから、正直物足りなかった部分もあります。また、いろんなトピック(バスのこと、障がい者差別解消のこと等)を作って、トピックごとに意見交換できる場も必要かなと思いました。どうやれば、スムーズに建設的な意見交換ができるか考える必要があると思います。会議や勉強会の場面では、行政にしろ、事業者にしろ、出席者が背負ってきているものがあり、自分の思いよりも会社や組織の立場で発言するようになるのでしんどそうに見えて、それを外せる場を作れたらいいなあと思います。

でも分科会のような場を持つことは重要だと思うんです。みんなが一堂に集まる場を維持してほしいです。当事者が参画するための会議だし、今後、当事者がどのように参画していくかも考えるべきだと思うんです。

また、当事者団体自身も、自分たちのことには詳しいけれど、他の障がい当事者のことまでは分かっていないし、分科会の出席者がどんな思いを持って集まっているのか、ということも知りたいです。

(※3) DPI 日本会議は、DPI の日本国内組織として、1986 年に発足しました。身体障害、知的障害、精神障害、難病等の障害種別を超えた 95 団体が加盟しています(2019 年9月現在)。

地域の声を集め、国の施策へ反映させ、また国の施策を地域へ届ける事。それが DPI 日本会議の活動の鍵となっています。

「DPI 日本会議」HP より



四国分科会で発言する井谷さん


長く活動しているからこそ理解できることは多々あって、僕も以前は会議に出席しても自分本位の発言をしていました。

「世界に段差なんていらんないんだ。全部フラットにしたらいい」と言ったりすると、視覚障がいの方から「それは違う。視覚障がい者にとっては、少し段差がある方が歩道と車道を区別しやすいのです」とたしなめられることもありました。話を聞

くとその通りだなと理解できますが、話さなければ分からないし、認め合うこともできないんですよね。

最初に話した「ピアカウンセリング」には、障がい種別を問わずいろんな方が来るので、僕みたいな脊髄損傷の障がい者と視覚障がい者とが初めて接するということもあり、僕自身はそういう場を通じていろんな障がい者との接し方を学べたと思います。

分科会では、「思いやり」について発言されている方がいましたが、「思いやり」は当たり前なことではないでしょうか。日本のバリアフリーはまだまだ「思いやり」に頼っている部分が多いと思います。確かに「思いやり」も大切ですが、それでよしとしてしまうと、「思いやり」のない人の場合は、心のバリアフリーが不完全になってしまいます。「思いやり」に頼らないバリアフリー化を進める必要があると思います。

 「CIL 星空」を運営していく中で、印象深かったことや、困難等があれば聞かせてください。


僕たちの活動は、自立者を出すことを一番の目的にしています。僕自身は自分で食べることもできない重度障がい者として、全介助で生きていますが、僕がいることで、そこに雇用が生まれて、彼ら（スタッフ）が生活できている側面もあるんです。互いがそれでやっていける形が生まれているわけです。それは介助制度が確立して、介助者がいる日本だからこそできることなんです。

立ち上げて10年たちますが、最初「CIL 星空」に入ってきた時は独身だったヘルパーも、結婚して、子供ができて… と家庭を築いたり生活できたりしていて、そんな状況は素晴らしいと思って、みんなに感謝しています。

自分がやった意味もあるけれど、「CIL 星空」があることで、人が生きて、生活できる。そうすることで、重度障がい者の価値も出てくる。そこが大好きなん

です。なおかつ重度障がい者が自分の意思で選んでやっていくことが重要で、施設や親元にいると、昔ほどの抑圧とか、厳しい環境とかではなくなっているとはいえ、決められた中での自由だし、時間等の制限もあります。でも、杵を取り扱った時は危険もあるけれど、それをも自分で判断してこそ、自分の力で生きていくということだと思います。自ら選んでいった結果が、『自立』だったらいいなと思います。

「CIL 星空」では健常者の人も雇っていますが、ヘンなのばかりなんです。そういうのを見てると面白くて、どっちが障がい者なんだか、って思うこともあります。新卒で入ってきて、「しっかりしてるなあ、すごいなあ」と最初は思っても、やはり子供なんだな、しっかり教えないといけないんだなと気づかされたりすることも。でも、そうやって人が育っていく姿は素晴らしいし、彼らが育ったということは僕自身も育ったということになります。お互いがロールモデル（自分にとって、具体的な行動や考え方の模範となる人物のこと）になっているんです。

 今年の参議院選挙では重度障がい者が議員になり、話題にもなりましたが、どのように感じられましたか？



「自立生活」のことをもっと知ってほしい、と学校訪問や講演活動も意欲的にされています。

僕は応援していたので、率直によかったと思ったんですけど、たくさん反発があったり、いろんな意見が出たりして、かえってそれがよかったのではないのでしょうか。「障がい者だから守られる」ではなく、議論することが大事ですし、議論なしには理解もないと思うんです。今回の選挙では、当事者二人だけではなく、他の人も議論に巻き込む形になったのがよかったと思いました。心ない声もあるかもしれませんが、今までテコでも動かなかったことが動き始めるわけですから、もっとバッシングがあってもおかしくないでしょう。でもそれが大事だと思います。

7年前に、三ツ井君（CIL 星空の事務局長）が自立する時の

ことです。特別支援学級でパソコンを習って、ある会社に就職することも決まっていた。そして、仕事をするためには両親に介助に入ってもらうことになったんですが、毎日介助に入るのは無理だということになって、結局2日間で辞めざるを得ないことになってしまいました。仕事のために学校でも頑張ってきたのに、なんかせつなくて… その当ても、今と同じように訴えていた人はたくさんいたはずなんです。だから二人が当選したことで、「介助者がいなければ働けない」ということがテーブルに乗っただけでもよかったのではないのでしょうか。もっと議論を巻き起こして、はじかれたり、認められたりしながら頑張りたいです。

「C I L 星空」として、今後はどのような活動を考えられていますか？

僕たちは「おもてなし」みたいなことをやっていますが、外から来た人に愛媛や松山のことを知ってもらうことを以前よりも多くやっています。市内にある観光地のバリアフリー化の取り組みにも関わっています。松山空港から市内までのルートが、障がい者も利用しやすいようにもっと改善されれば、もっと案内しやすくなるかなと思うので、そういう部分にもとりくみたいです。また、電車やバスが通っていないところは、何か手伝えればいいかなと思って、できる範囲でとりくんでいきたいと思っています。

僕のルーツは、道後温泉本館を立てた伊佐庭如矢

(※4)で、僕は彼の子孫にあたります。だから、彼がやり残したことをやりたいな、と思っています。

今でも道後では、大浴場に車椅子では入れない施設があって、これから整備が必要だと感じます。みんな

が気持ちよく過ごすためには、景観だけがよくてもダメで、いろんなことに目を向ける必要があるでしょう。とはいえ、以前よりは施設のバリアフリー化や接遇も進んでいて、そういった面では、自信をもって地元を紹介したり、宣伝したりできるようになったかな、と思います。

僕たちは地域で暮らしているので、東京でも会議等で発言したりしますが、一方で僕には現場があって、「1対1」で話を聞ける場所があるので、それを大事にしたいです。目の前の人を大切に幸せにしていく——そうした経験を携えて、大きな場所で話せばいいかなと思います。今のメンバーにもそれを「強要」しています(笑)「それがいいから！」と。

(※4) 明治23年(1890)、初代道後湯之町町長に就任した伊佐庭如矢は、当時老朽化していた道後温泉本館の改築に取り組みました。当時、多くの反対の声があがり、一時は反対派が宝厳寺に立てこもって抵抗があったなか、「100年の後までも、他所が真似できないようなものを作ってこそ、はじめてそれが物を言うことになる」という道後の繁栄を願う伊佐庭如矢の強い気持ちによって、明治27年(1894)、道後温泉本館改築の偉業を成し遂げられました。「道後温泉公式HP」より

それから、松山市内の小中学校でも授業をしていて、すでに半分くらいの学校には行きました。ゆくゆくは「インクルーシブ教育」（障がいのある者と障がいのない者が共に学ぶ仕組み）になればいいなと思っていますが、今は限られた時間で自分たちのことを伝えています。

障がい者は介助してもらおうもの、という受け身の考えがあって、それが「当たり前」のこととして、健常者と分けられてしまうんですね。でも、子供の頃から一緒にいることで、それは普通の関係になると思うんです。その根底にあるのが教育なのかなと思います。そこを目指してやっていきたいです。

インタビューを終えて

「CIL」は、自立生活センター（Center for Independent Living）の略称で、「星は暗い夜空を照らし昼間も見えないだけでどこかでちゃんと輝いている」という思いから、センターに関わるすべての人が、星のようにどんな状況でも輝く存在でいてほしいという願いのもと「CIL星空」と名付けたとのこと。20代から40代の比較的若い障がい当事者を中心に、健常者も含めた約20人のスタッフが、「よく暴れ！よく遊び！よく学ぶ！」をモットーに元気いっぱい活動しています。

井谷さんと初めてお会いしたのは、7月に開催した「移動等円滑化評価会議四国分科会」の会場でした。やや緊張して出迎えた私にジョークを言って、その場が和んだことを思い出します。今回インタビューでは、分科会やバリアフリー研修のあり方などに対して、貴重な提言もいただきましたが、ユーモアを交えながらの話しぶりに「インタビュー」であることを忘れ、聞き入ってしまいました。そんな、人を引き付け、引き寄せる力が井谷さんにはあると感じたインタビューでした。

インタビュー実施日：令和元年10月9日・聞き手：出海、横山